

『観弥勒菩薩上生兜率天経』の成立背景

——弥勒と阿逸多の關係を中心に——

打 本 和 音

『観弥勒菩薩上生兜率天経』(以下『上生経』)は、兜率天上の弥勒菩薩に救済を求める信仰形態、いわゆる「上生信仰」の唯一の所依經典として歴史的にも研究史的にも重要な位置を占めてきたが、本経自体の批判的研究は十分になされていない。しかし、「上生信仰」が『上生経』に依拠する形で解釈されてきた歴史を鑑みれば、本経自体の検証は弥勒信仰の全体像を解明するうえでも急務である。

そこで本発表では、『上生経』の成立背景を明かすことを目的に、本経中における弥勒と阿逸多の位置づけに着目して考察を試みた。『上生経』は、難解な多くの陀羅尼を他に先んじて解した弥勒に対し、優波離が「阿逸多は凡夫であるのに何故仏は授記をなさったのか」と問いかける場面から始まる。広く知られるとおり阿逸多は弥勒の別称だが、能力が高い弥勒の姿を記した直後のこうした優波離の態度は不自然であり、歴代の学僧達にも長らく疑問視されてきた。この点に対し、発表者は『中阿含経』『説本経』にみられる弥勒と阿逸多のイメージを援用することで再解釈を試みた。「説本経」での弥勒と阿逸多は別人物として登場し、未来世にそれぞれ仏陀と転輪聖王になりたいと釈迦に誓願する。興味深いことに、釈迦は最終的に両者へ記別を授けはするものの、阿逸多の誓願は「汝愚痴人なり」として一旦退ける一方、弥勒の誓願は称賛し即座に授記を与えている。ここには「弥勒＝智者」「阿逸多＝愚者」のイメージが打ち出されているのである。

これを踏まえて『上生経』に目を戻せば、「弥勒」と表記される際は能力

ある菩薩として、「阿逸多」と表記される場合は愚者として説かれており、「説本經」の立場と類似する。したがって『上生經』は、「弥勒＝阿逸多」という知識のみならず、「説本經」に特徴的なイメージをも保持された土壤で成立したと考えられよう。

以上、『上生經』のベースに『中阿含經』所収の説話の影響があることを指摘し、本經成立にまつわる一側面を明らかにした。今回の結果を受け、本經についてより複眼的視野に立った検討が必要となるが、具体的考察は今後の課題としたい。

(アジア仏教文化研究センター・リサーチアシスタント)